

1880年代教育史研究会ニューズレター

2002年5月1日 創刊号

<1880年代教育史研究会の発足とニューズレター創刊にあたって>

私たちは、2001年9月30日上越教育大学にて「1880年代教育史研究会」を発足させました。風変わりな名称のこの研究会は、戦後の日本教育史研究において豊富な蓄積をもつ1880年代（明治10年代）の教育史を、政策・制度・実態を貫いて捉え、その延長線上に森文政期を捉えようと試みることを目的としています。アプローチの方法として、したがって教育史に限定せずにより広い視野からのアプローチが必要と判断し、隣接諸領域である政治史・経済史等を専攻する研究者に広く呼びかけています。研究会会員は、東京・京都・広島等々に在住している若手研究者が中心であるため、頻りに会合をもつことは不可能なので、「ニューズレター」を中軸にして研究交流を活性化させようと思っています。そしてこの「ニューズレター」は、会員ではなくとも会員の近くの方にお読み頂き、さまざまな意見・助言を頂戴できればと考えています。「創刊号」の本号は、本年2月に京都にて開催された第1回研究会の4報告のうち、谷本・小宮山両会員の報告を掲載しました。また、上越教育大学での設立以前から本研究会設立のために尽力し、病に倒れた後にも強い指導力を発揮され、3月30日に永眠された本研究会代表中野実の追悼文を掲載しました。

（荒井明夫（文責）・小宮山道夫・田中智子・谷本宗生・富岡勝・福井淳）

<1880年代教育史研究会代表中野実さんの逝去によせて>

1880年代教育史研究会は、今は亡き中野実さんの強い指導力の下で設立されました。

中野さんは数年前から日本教育史上における森文政期の捉え直し、再評価の試みに意欲的に取り組んできました。その成果は、教育史学会や東京大学史紀要等に発表されています。

中野さんは、森文政を捉え直す視点として、1880年代（明治10年代）の教育史を、政策・制度・実態を貫いて捉え、そのため政治史・経済史の成果を吸収し、広い視野から再検証することを力説していました。「1880年代の政策・制度展開が、帝国憲法体制に収斂していくのではないかと・森文政はその過渡的位置にあったのではないかと」という仮説を、病床で研究会構成員の一人である荒井明夫に語ったことがあります。こうした研究目的・方法および仮説は、中野さんの大学史・高等教育史のひとつの到達点であり、同時に帝国大学形成史に着手していた中野さん自身の当面の研究課題であったと思います。

中野さんは、病に蝕まれた体にも関わらず様々なアイデアを発してくれました。「2月の京都での研究会は自分が不在でも必ず開催するように。三高史料室を見学するように。」「若い研究者が中心なので『まるでひとりごとを言っているような』ニューズレターを頻繁に発行して研究交流を活性化させる」「ある程度の成果が出てきたら教育学会のラウンドテーブルか教育史学会のコロキウムを設けよう」と等々。また病院にお見舞いに来た人にこの研究会の話をし、「是非一緒にやりませんか」と誘ってもくれました。

病院にお見舞いに出かけた私たちは、中野さんを励ますつもりが、逆にいつもこうして励まされたのでした。

2月の京都での研究会の際、中野さんの意に応えるべく「ニューズレター」創刊を決め、その発行日を3月30日と決めました。まさかその日が命日になるとは……。

残された私たちは、痛恨の思いのままその後の日々を過ごしてきましたが、このニューズレター発行を期に気持ちを改め、悲しみを乗り越えて中野さんの志を受け継ぎ、協力して前進していく決意です。

(荒井明夫・小宮山道夫・田中智子・谷本宗生・富岡勝・福井淳／文責 荒井明夫)

<第一回研究会報告①> 第1回研究会の報告を終えて

谷本 宗生（日本大学文理学部非常勤講師）

今回の研究会では、1880年代の高等教育に関する先行研究のいくつかを紹介した。紹介した先行研究は、次のとおりである。1、渡部宗助「旧制高校と地域社会～戦前日本の「大学と地域社会」への試論～」広島大学大学教育研究センター『大学研究ノート』第39号（1979年）、2、館昭「帝国大学令と帝国大学の矛盾～確立期の大学行政に関する一考察～」『大学史研究』第2号（1981年）、3、寺崎昌男著『日本における大学自治制度の成立』の佐藤秀夫による書評『大学史研究』第1号（1979年）、4、谷本宗生「1880年代における「邦語大学校」設立の志向～高等教育改編過程における欧化とナショナリズム～」『関東教育学会紀要』第20号（1993年）。先行研究のその1は、地域社会と高等教育との関係性を論点に、高等中学校の創設期を扱ったものである。計量分析を研究に用いた旧制高校研究の先駆といえる。その2は、「帝国大学令」と帝国大学実態の齟齬を取り上げ、帝国大学令（1886年）の画期性強調（森文政）に対する修正を提起したものである。中野実研究の基調とも相通じるものといえる。その3では、教育（学芸）における明治維新をいかにとらえるか（佐藤評）という森文政評価の問題を指摘している。本研究会の主要テーマともリンクしている。その4は、田中文政の国府台大学校計画が挫折したのち、専門学校としての開成学校（東京大学）が1880年代にかけて他省庁の高等教育機関を統合しながら日本の高等教育機関として自立化していく過程を扱ったものである。お雇い外国人教師の削減と邦人教官の台頭、官費留学生の派遣と教授用語の邦語化（学術用語の選定・統一）、学問と教育の分離（二元論）などを考察している。

今後の研究会では、先行研究にみた重要な問題点をいかに自己の研究に据え、実証的に解明していけるかが課題といえよう。高等中学校の設置からその実態まで、高等中学校の包括的な研究をこの研究会では継続して行っていきたい。今回の研究会で見学した三高関係資料は、その意味では大いに参考となった。

<第一回研究会報告②> 1880年代教育史研究会への参加にあたって

小宮山道夫（広島大学五十年史編集室）

本研究会への参加にあたり、現在考えている今後の研究の方向性について述べてみたい。

筆者が現状で取りうる方向性としては、(1)森文政期研究の隙間を見つけるもの、(2)広島という地の利を生かしたもの、(3)自身の研究の延長線上に設定するもの、の3つを想定できる。(1)は、恥ずかしながら筆者自身が森文政期については教科書的理解しかないため、自習のための基礎作業として想定したものである。しかし先行研究の収集・検討に時間がかかり、2月の研究会での発表は断念している（ただしこれは今後のためにも密かに継続する予定です）。(2)は、この際、1880年代前後の広島県における文部行政について、『広島県報』から関連布達等を抜き出して一覧化することで、何らかの解説を試みようとするものである。しかしこれも作業自体がかなりの時間を要するものであり、現在後込みをしている状況である。(3)はこれまでの研究の中で残してきた課題について、この機会に詰めていこうとするもので、(2)の「地の利を生かす」ことにも通じるため、現在最有力候補に位置づけている。

さて、筆者はこれまで専門職の成立と、そこにおける教育機関の定着過程に関心を持ってきた。それは専門職教育が、被教育者の立場から見た教育機関の効用、すなわち教育機関に望む教育機能が直截的に要求される分野であり、被教育者と教育機関との関係を如実に表す重要な視点と考えるからである。そしてその事例のひとつとして、これまで医学教育に関する数編の考察を行ってきた。

古い話になって恐縮だが、筆者は拙論「広島医学校における教育の展開」（中国四国教育学会編『教育学研究紀要』第41巻第1部、1995年）において、明治10年代という短い期間に興隆と衰退を見せた地方公立医学校に焦点を当て、広島医学校を事例としてその教育機能について考察した。分析の主眼としてカリキュラム構成、学校規模、財政面の3点を設定し、その実態に迫ったものである。

この考察を通して、筆者は広島医学校が東京大学医学部通学生教場をモデルとして、カリキュラム、学校規模ともに当時としては恵まれた条件下にあったことを明らかにした。このことは広島医学校が、卒業により医術開業試験を免除される甲種医学校に認定されていたことからもうかがえることである。たがそのような広島医学校も、その後明治21年3月を以て廃校となる。医学校の抱えていた最大の問題はその高額な経費であり、主因は甲種医学校認定の条件を満たすため、年間8千円あまりの地方税支弁を要したことであった。この額は広島中学校や広

島師範学校への支弁額を上回っていた。以上が拙論で扱った内容である。

他の公立医学校を詳細には見てはいないが、甲種医学校は皆同様の問題点を抱えていたことは間違いない。公立医学校廃止の論理について先行研究は、各府県における他の地方税支弁による中等教育機関の整備を主眼としたものと説明している。

当時の地方財政の状況を考えれば、明治20(1887)年9月の勅令第48号「府県立医学校ノ費用ハ明治二十一年度以降地方税ヲ以テ之ヲ支弁スルコトヲ得ズ」が、その論理上にあるとする解釈は順当なのかも知れない。しかし後に官立の高等中学校医学部として各医学校を改組する際、設置費や経常費などを地方税で支弁させたことは、その主旨とは少し矛盾した行為であるし、広島の場合は中学校への支弁についても廃止しているという現実がある。そのため筆者は勅令の主旨と行政の実態との間には少なからぬ乖離があると感じている。この点が明らかになれば、高等中学校の基本概念や、当時の中等教育の整備政策を理解する一助となるのではないかと思われる。そこで現在筆者はこの件について、政策過程の分析を柱とした実証的な究明を心がけたいと考えている。

<中野実さん追悼①> 中野実さんの死を悼む

小宮山道夫(広島大学五十年史編集室)

中野さんが亡くなられてからもうひと月が過ぎた。そう頻繁にお会いする訳ではない私にとって、未だに実感のわかない事実である。

私が初めて中野さんにお会いしたのは1995年3月、修士課程在学中のことだった。東大の医学部附属図書館に用があった私は、ちょうど同じ日程で東大で調査をしていた研究室の先輩、竹本英代さんに促されるまま、大学史史料室にお邪魔し、中野さんに紹介してもらうことになった。安田講堂に足を踏み入れるのは初めてのことで、その外観に似合わぬこぢんまりとした通用口から入り、狭隘な階段を登り、これまたどこが通路と史料室の境界なのか理解しがたい空間を抜けて入った史料室の光景は印象深く残っている。そしてその光景以上に印象に残っているのは、中野さんだった。

特徴的な額のほくろ、くりくりと輝く瞳、大きくそして痛快な響きを残す笑い声、時おり見せる真剣で鋭い眼差し、話の本質をえぐり出す簡潔な問いかけなど、その風貌と存在感は圧倒的だった。また修論のテーマを漠然としか擱んでいなかった私は終始気圧され続けていたが、非常に楽しく充実したひと時を過ごさせてもらった覚えがある。

それから3年後、私は年史編纂の仕事に就くこととなり、中野さんとは思いがけずも仕事上のアドハイスを頂くような繋がりが生まれた。取材のため3年ふりに訪れた大学史史料室はほぼ変わらぬ様相で、史料室で中野さんにお会いすると不思議な安心感があった。東大に大学史史料室がある限り中野さんが居て、中野さんが居る限り大学史史料室もまたある、というような漠としつつも疑いようなない錯覚がそこにはあった。

ところで私を知る人のなかにはこう書くと意外に感じる人もいるだろうが、私は何かと気後れしがちな質なので、親しい人に会っても聞きたいことや言いたいことを口に出出来ないまま、しおしおと帰ってくるのが間々ある。中野さんとは仕事上の会合である程度定期的にお会いできるようになったわけだが、そのごく限られた機会においてもこれは例外ではなかった。中野さんが他の人と話をしているのを見れば話のときれるのを待ってしまったり、二人で話をしても話の流れを意識して自分の聞きたい話題に切り替えなかったりと、小さな後悔は数多い。しかし今やその小さな後悔は絶対的で大きな後悔へと変わってしまった。中野さんにこそ伺っておきたかった事を私が知る機会はまだ二度と無い。人と話す時はもっと凶々しくすべきだとこれほど痛切に感じさせられたことは無い。代償の大きすぎる教訓となってしまった。

私が中野さんに最後にお目にかかったのは昨年教育史学会だった。ロビーで中野さんの姿を目にした時、事態が尋常ではないことを私は理解した。その数カ月前に電話で病状をご本人から伺っていたため、ある程度の想像はしていた。それでも新潟で目にした中野さんの変貌ぶりに私は言葉を失ってしまった。

私とその前に実際にお会いしたのは、約半年前で、京都で行われた研究会においてだった。その時は移動が辛そうではあったものの、血色など見た目にはそうひどく悪い状態ではなさそうだった。散会後に偶然乗り合わせたバスの中で交わした話も、その時取り組んでおられた学徒動員経験者への聞き取り調査と今後の展望などで話題は希望に満ちていて、足を重そうに引きずりながら去っていった後ろ姿が少し気がかりになるだけだった。

それに比べ、目の前にいる中野さんは別人と見まごうばかりだった。しかし中野さんは些細な打ち明け話でもするかのように病状を説明され、「今はだいふ調子がいいんです」とも言われていた。その言葉につられてついついその場で中野さんを引き留めてお話しをさせてもらった。それが中野さんと交わした最後の会話となった。

中野さんの言葉には独特の深みと暖かみをもつ言葉が多かった。最後の会話の際にも私にとって深く重い言葉をいただいた。しかしここでそれは書かないでおきたい。その代わりに中野さんのお人柄を表す言葉を一つだけ紹介したい。これは広島大学50年史編集室で企画した研究会に中野さんを講師としてお招きした後、頂いた手紙にあったものだ。「講演の最後にはいつも、若手の研究者を励まし、育てて下さいというのですが、それを失念してしまったことがいまだに気になっています。」中野さんの暖かさがいかにも伝わってくる言葉であり、忘れられない一文である。

お会いした回数にしてしまえば10回にも満たないであろう私が、今回このように追悼文を公にするのは分を越えているように思える。また恐らく中野さんがこれを知ったら「どうしてまた小宮山さんが？」とあたかも「不思議」と顔に書いたようなあの表情で尋ねられ、「ああそう」とこれまた「納得」と書いたような表情を見せ、「それはどうもありがとう」と今度はこれまた「感謝」と書いたような満面の笑みで答えられる様子が思い浮かぶ。

中野さんの反応を想像すること、実際にお会いすること、私にとって何れも楽しみなことであったが、今は思い出すということでは中野さんと接することは出来ない。本当に借しい人を失った、すべてはこの一言につきるとしみじみと感じている。

<中野実さん追悼②>

中野実さんとのこと

谷本 宗生（日本大学文理学部非常勤講師）

3月末に逝去された中野実さん（東京大学史史料室）について、この研究会との関係などを研究者として後輩にあたる私（谷本）の立場から少し話したい。中野さんの研究業績等の紹介については、日本教育史・大学史研究者らによって近く公刊されるのではないかと想像されるのでそれに譲りたいと思う。中野さんのライフ・ワークの一つであった（実はあまり多く知られていないと思うが、「戦争と大学」というテーマについてもご本人は強く自身の研究としてこだわっていたように思う）「森文政期の大学・高等教育政策」研究が、この研究会と中野さんとの根源的な結びつきであったと私は考えている。そのことを縁にして、同様に森文政期の中等教育政策研究を行っていた荒井明夫さんが中野さんと問題意識を共有して研究会が実質的に形成されたといえよう。

近代日本大学史研究ならびに大学史編纂において中野さんを先行研究者として尊敬していた私も、自然と中野・荒井両氏から研究会へと導かれたというのが正直な実感である。荒井さんとともに高等中学校研究に従事する私は、生前中野さんが第三高等学校関係資料（第1回研究会で見学済み）と同様に、1880年代の教育史研究において貴重な資料としてすすめられていた第五高等学校関係資料を所蔵する熊本大学などに今後研究会として機会をみて訪れてはどうかと考えている。学校所蔵文書等の扱いについては、私はアーキヴィストの中野さんから非常に学ぶべきことが大きかった。まず、当該所蔵資料の全体的な目録を作成する必要があることなど…。これからも、そのような中野さんの姿勢に学んでいくことに変わりはない。

昨年9月末、上越教育大学で開催された教育史学会の折に研究会を立ち上げたが、中野さんは体調不良にかかわらず強行参加した。現在の研究会メンバーのうち荒井・小宮山・富岡・谷本は、その際に中野さんとともに研究会の在り方について打合せを行ったわけである。1880年代が、近代日本（教育）史研究においていったいどのような意味を示す時期なのか、学際的に考察しなければならないことを。

<中野実さん追悼③> 中野さんから研究上の励ましを受けて

富岡 勝（近畿大学）

中野実さんにはじめてお会いしたのは、今から11年前の1991年夏でした。私は、京都大学で旧制高等学校・旧制大学の生徒・学生自治に関する修士論文を書いていたが、ちょっと煮詰まっていたところ、非常勤で授業に来てくださっていた久木幸男先生が、「そのテーマな

「ぜひ中野実さんにお話をききなさい」と紹介状を書いてくださり、立教大学の近くで中野さんにお会いしました。そのころ、中野さんは帝国大学の学生監の日記の分析のような作業をされていて、そうしたお話とともに、修士論文に関してアドバイスをしていただき、そのおかげもあって、なんとか博士後期課程に進むことができ、本格的な研究生活に入っていくことができました。

それから数年して京大で百年史の編纂が本格的に始まった頃、当時百年史編集史料室の助手だった西山伸さん（現在、京都大学大学文書館助教授）に大学史研究に関心を持つ者として私のことを紹介してくださったのも中野さんでした。その縁で1994年の12月から京大生協百年史の編集作業に補佐員として従事して木下広次文書などの貴重な史料と出会うことができ、さらに1998年6月からは百年史編集史料室の2人目の助手として勤務するという幸運にも恵まれました。

また、同じ1998年に松本市の旧制高等学校記念館で夏季教育セミナーがスタートしたとき、発表をしないかと声をかけてくださったのも中野さんでした。旧制高等学校に関する研究者と交流することができる上に、旧制高等学校出身者のみなさんに研究を聞いていただけるという私にとって願ってもない場で、以来、毎年のように参加させていただいています。

中野さんは、もともと何の面識もなかった私に対して、教育史研究全体を発展させたいという広い観点から、このような願ってもない研究上の励ましを与えてくださったと思います。私の研究上の恩人の一人です。

3年ほど前には、その旧制高校記念館夏季教育セミナーの夜、懇親会2次会と称して中野さんをはじめとする研究仲間と飲んでいたとき、中野さんからの「最近、研究の進み具合はどう？」という問いに対して私は、「まあぼちぼちですね」というような頼りない返事しかできませんでした。その後も私なりに頑張ろうと努めてきましたが、この1880年代研究会でじっくり議論をしていくなかで少しでも中野さんからの問いに答えていこうとしていたところでした。今回の中野さんの早すぎるご逝去は本当に残念でなりません。このくやしさを忘れずに研究をすすめ、少しずつであっても中野さんからいただいた研究上の励ましに、お返しをしていきたいと思っています。

<中野実さん追悼④>

中野実さんと80年代研究会

荒井 明夫（大東文化大学）

もう随分前のことである。中野さんとお会いするたびに、中野さんから「荒井さん、一緒に森研究をやろうよ」とお誘いして頂いた。そのころ森文政期の地域における中学校設立の事例研究を通じて、なんとか森研究に新たな史料・分析視角からアプローチしてみたいと考えてはいたものの、課題の大きさから逃げていた私は「事例研究優先」を口実に、躊躇していた。

しかし、広島県立尋常中学福山誠之館の事例研究の折、1885（明治18）年7月の史料に「近

々中学校条例相廃シ、中学校ハ一県一中学ト相成」とあったのが非常に気になっていた。なぜならば1886（明治19）年勅令第15号「中学校令」第六条の骨子はすでに公布9ヶ月前にはできあがっていたことになるからである。このことを中野さんに話すと、明治10年代の流れの帰結として森を捉え直す必要があるということを熱心に話して下さった。

高等中学校に関する研究の必要性も胸がわくわくするような議論だった。

私が事務局長を務める全国地方教育史学会は、2001年春に仙台にて学会大会を開催することになった。当然シンポジウムテーマも仙台に縁のあるテーマということで、高等中学校研究になった。前年8月の学会常任幹事会で、高等中学校に関する先行研究整理を試み、高等中学校に関する新たなアプローチの視点（個別学校ごとに地域との関係を重視する視点）の重要性を力説した。その報告と議論をすぐに中野さんに報告した。

中野さんはここでも私の話しを熱心に聞いて下さり「とても面白い企画だよ、荒井さん」と賛成して下さった。その年の暮れ、慶応義塾大学を会場にした同学会初めての試みの公開研究会で、中野さんは私の報告に対しコメントして下さった。その会終了後、慶応義塾の関係者の方々が設定して下さった懇親会で、非会員ながら参加して下さった寺崎先生交えて時間を忘れて議論を重ねたことは忘れられない貴重な思い出である。翌年の学会大会シンポジウムで、当然中野さんに御報告者のお一人としてお願いしたが、既に中野さんは病との闘いを強いられていた。中野さんの御推薦で西山さんというすばらしい「ピンチヒッター」に恵まれたものの、中野さん御自身の、恐らく渾身の力を込めたであろう報告を聞けなかったことは残念でならない。

その後、中野さんとはお会いするたびに本研究会が議論の中心テーマとなった。暑い8月の松本での旧制高等学校研究会の折、さらには本年1月入院中の中野さんを見舞った時など。1月のお見舞いに参上した時などは「政治史・経済史を専門とする人をどうしても迎えなければ。帝国憲法体制への収斂として森文政期は位置付くと思うので」と、とても病気とは思えない程熱心に語っておられた。

病室をあとにする時、「2月の京都には出かけられないが、6月には回復できると思う」と仰っていた。私は「6月の研究会は御無理の無い様に中野さんのご自宅の近くの会場にしましょう。秋の教育史学会頃に本格復帰ですね。」と言って笑って別れた。

旅立たれる前日、神辺靖光先生や富岡さんと病院に御一緒した。おやつれではあったが意識もはっきりされ「研究会何も出来ずすみません」と言って下さった。最後の最後まで研究会のことを心配して下さった。中野さんが文字通り命燃え尽きるまで尽力して下さった研究会を大切に育てていきたいと静かに思っている。

<研究会連絡先> ☎175-8571 板橋区高島平1-9-1 大東文化大学荒井明夫研究室気付
「1880年代教育史研究会」事務局